



## 子どもの幸福感②

多極化する子どもの世界～深刻な「子どもの自殺」「いじめ」「不登校」「児童虐待」



子どもの権利擁護委員 関谷 道夫



前回のコラムで、ユニセフの報告で「精神的幸福度」が先進国36か国の中で32位と、著しく低水準であることを述べました。他の先進国と比較して精神的幸福度の低い大きな理由に、高い自殺率が挙げられています。その他にも、いじめに遭っている子どもが多いこと、新しい友達を作るという社会的なスキルに自信がない子どもの割合が高いこと、などが指摘されています。

2025年版の**自殺対策白書**で、2024年の小中高生の自殺者数確定値は、**529人**（前年比16人増）となりました。新型コロナウイルス流行後、高止まりが続き、統計のある1980年以降で**最多**となっています。これは、1日に約1.4人、1週間で約10人の小中高生が自ら命を絶っているということになります。一方で2024年の日本全体の自殺者数（確定値）は2万320人で、前年から1517人減少し、統計を取り始めた1978年以降で2番目に少ないものでした。つまり、自殺者数は減少した一方で、小中高生の自殺者数は高止まりになっていることになります。子どもの自殺の実数は大人に比べて多くないという人もいますが、もともと子どもの自殺数は少なかったこと、隠れ自殺が相当数あること、子どもの出生数が大幅に減少している背景を考慮すると、看過できない問題です。

G7各国における10～19歳の死因において、自殺が1位になっているのは日本だけです。「自殺」の死亡率をみても、日本は最も高くなっています。

日本の年代別の死亡原因は、40歳になるまでは、悪性新生物・心疾患・脳血管疾患などではなく、自殺が第1位となっています。自殺防止対策は、若年層だけでなく、日本のメンタルヘルスの大きな問題となっています。

小中高生の自殺の内訳は、小学生15人、中学生163人、高校生351人。前年から男性は20人減り、女性が36人増えました。特に中学生の女性が19人（約24%）、高校生の女性が19人（約11%）増えました。月別でみると、9月が最も多い59人でした。

小中高生の自殺の原因や動機は、「**学校問題**」が272件と最多、「**健康問題**」「**家庭問題**」「**不詳**」「**その他**」と続きました。「学校問題」では「**学業不振**」が最多の65件、「**学友との不和（いじめ以外）**」60件、「**進路に関する悩み（入試以外）**」51件と続きました。「入試に関する悩み」は33件、「いじめ」は9件でした。

青森県でも、小中高生で4人の自殺があったと聞いています。

## スタッフコラム【令和7年度第5号】

2024年のいじめの認知件数は、過去最多を更新しています。文部科学省調査によると、いじめの認知件数は76万9022件（対前年で3万6454件増）でした。

また、生命や心身などに重大な被害が生じた疑いがあつたり、長期欠席を余儀なくされたりするいじめの「重大事態」は1405件（同99件増）で、いずれも過去最多となっています。

県内のいじめ認知件数は5941件で、特別支援学校を除く全校種で前年度を上回りました。

### 不登校児童生徒の大幅な増加も話題となっています。

全国の不登校児童生徒は12年連続で増加し、過去最多を更新し続けています。2024年の不登校児童生徒数は小中学校をあわせて35万人となりました。30人クラスに必ず一人は不登校の生徒がいる割合です。

県内でも、少子化が進む中、不登校児童生徒数は10年前の約4倍の2844人で、過去最多を更新しました。

### また、児童虐待の増加も注目されています。

厚生労働省が2025年3月に発表したところでは、全国の児童相談所が2023年度に対応した児童虐待相談は22万5509件（前年度比5%増）だったと発表しました。統計開始以降、過去最多を更新し、増加傾向に歯止めがかかる状況です。

子ども関連の統計では、ネガティブな項目で「**最多**」の文字が目立っています。

「ハインリッヒの法則（1:29:300の法則）」がよく取り上げられますが、1件の重大事故の背景には、29件の軽傷事故と、300件の事故に至らなかつたヒヤリハット（異常）があるという経験則です。1件の自殺の背後には、それに至らない多くのメンタルヘルス不調、自傷行為、自殺念慮・企図、未遂事件が横たわっていると考えるのが妥当です。隠れメンタルヘルス不調、隠れ自傷行為が潜んでいると想えるのが普通です。

子どもの権利相談センターにも、子どもから「これから自殺する」という予告電話がかかってきます。緊急性や切迫度を判断し、最優先ケースとして対応しています。

基本的に、**自己肯定感**と**幸福度**には強い正の相関関係があるとされています。幸せに育ち、自己肯定感が高いほど幸福度も高くなります。逆に、自己肯定感が低いと幸福度も低くなる傾向になります。自己肯定感が高いと、人生の充実感が高まり、失敗を恐れずに新しいことに挑戦できるようになるため、ポジティブな行動が増え、幸福感につながります。日本の子どもは健やかに自己肯定感・自尊感情を育んでいるでしょうか？

「資源のない日本では、教育こそ資源だ」として、皆が学校教育や家庭教育を大事にしてきました。これまで取り上げたデータを踏まえて、日本の子育てや学校教育の「当たり前」を、ちょっと俯瞰して、検証してみたら如何でしょうか！

（次回は、子どもとリンクする「大人の幸福感」について考えてみます。）